

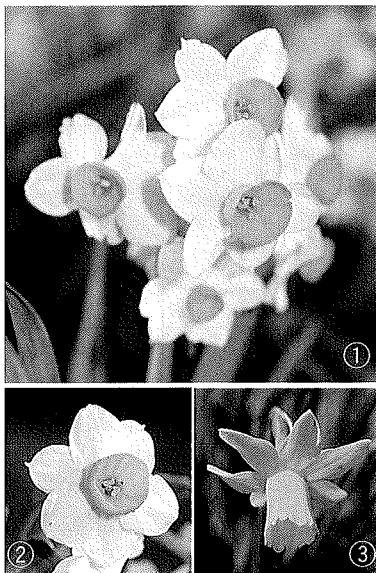
編集後記

今年の7月北海道洞爺湖で開かれるサミットでは地球温暖化の問題が最重要課題として討議される。地球温暖化問題は今世紀人類に課せられた最大の難問である。希望が持てる解決策を打ちだしてもらいたいものだ。

今年の正月も暖かい。寒の入りだというのに関東から西は気温14℃以上と春3月中旬の気候である。温暖化を肌で感じるようになった。この暖かさにつれて南房総や伊豆半島では春の訪れを告げるスイセンの花が咲きだしている。

スイセンの名は漢名の「水仙」を音読みしたのが和名で、中国では伝説の水に住む仙人ということから水仙とつuitaといわれている。スイセンは「ヒガンバナ科」の多年生で10月頃に地中の球根から4～6枚の線形の葉を出し11月～4月にかけて茎の先に5～7個の花を横向きに咲かせて4～5月には枯れる。

花は下側に3枚の萼、上側に3枚の花弁が着くが萼と花は形、大きさ、色が全く同じなので区別がつかない。こうした花の場合は萼と花を一緒にして花被と呼び外側を外花被片、内側を内花被片と呼ぶ。また、スイセンには他の花にはあまり見られない、花の中心に黄色の盃状の副花冠がありその中に雄しべと雌しべがあるがスイセンは種子ができない。この副花冠が品種改良によって長くなったものをラッパスイセンという。



▲①スイセン。②スイセンの花は萼3,花3からなりこの6枚を一括して花被片と呼ぶ。③ラッパスイセン

(写真③)

スイセンのように冬に生長する仲間にはフクジュソウやクロッカスなどがあるがこの仲間は冬によく日の当る落葉樹の下でよく生育し、落葉樹の葉が茂ってきて日が当らなくなる夏には枯れるという習性がある。つまり落葉樹と時間差を利用して同じ場所にすみ分けている訳である。こうしたことからスイセンやフクジュソウなどは「スプリング・エフェメラル」春植物と呼ばれている。

スイセンは地中海沿岸原産のフサザキスイセンの変種で古い時代にシルクロードを経て中国に渡ったものが野生化し、それらの球根が海流に乗って日本に漂着し定着した(平安末期頃)といわれており、現在の日本でのスイセンの自生地としてよく知られる南房総、伊豆半島、淡路島、越前海岸などは黒潮や対馬海流などの暖流が流れる海岸線にあることを考えると納得のいく説である。

スイセンの花言葉はブライド。高潔、自惚れ。球根は「求婚」につながることからプロポーズの時にスイセンの球根を身につけておくとくまうくとか。興味のある人は試してみても如何？

なお、スイセンは全草有毒(特に球根)植物で、誤って葉などをおひたしなどにして食べると嘔吐状態を起こすので注意を。

㊦

財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東1丁目26番6号
電話 (03) 3832-4188 (代)
FAX (03) 3833-1807
<http://www.japr.or.jp/>

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 小川 奎
発行人 植調編集印刷事務所 廣田 伸七

発行所 東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会
植調編集印刷事務所
電話 (03) 3833-1821 (代)
FAX (03) 3833-1665

平成20年1月発行定価525円(本体500円+消費税25円)

植調第41巻第10号

(送料270円)

印刷所

(株)ネットワン

R100
古紙製紙率100%再生紙を使用しています